

音 楽 科

諸要素を音楽的根拠とした音楽活動に関する研究

—拍・リズムと旋律を中心に—

井 内 志 穂

1 研究の背景と目的

我が国の音楽科教育では現在、平成20年改訂の学習指導要領に共通事項として基礎の内容が示されたことにともない、基礎に学習の重点が置かれる傾向にある。共通事項は、リズムやテンポ、強弱といった音楽を形づくる要素について記されたものであり、これらの要素を知覚・感受しながら活動を行うことで、音楽的根拠をもちながら活動をすすめることができ、より豊かで充実した音楽活動ができるようになる。すなわち共通事項（音楽の諸要素）に関する能力は、音楽活動の基礎となるものであるといえる。

基礎に重点が置かれたのは今回の改訂が初めてではない。学習指導要領「音楽」の変遷をたどると、最も基礎に力を入れていたのは、昭和43年改訂のものであることがわかる。この改訂においては新たな領域として「基礎」が設けられ、音楽の諸要素に関する能力を音楽的な感覚として身につけさせる教育が目指された。また、昭和53年改訂においては、基礎領域こそなくなったものの、重点事項として音楽の諸要素が示されたり、表現・鑑賞領域の指導事項の中に音楽の諸要素が明記されたりするなど、引き続き基礎に重点を置いた教育が目指された¹⁾。今回、教育全体が知識を確実に習得し、活用していく流れとなっていく中で、音楽科においても再び、基礎的な知識を確実に身につける、基礎に学習の重点を置く方向へと転換した。

これを受けて、諸外国の音楽教育における基礎の扱いをみた研究として、井内(2013)²⁾が挙げられる。井内は、オーストラリアの初等音楽教科

書を用いて、7種類の音楽の諸要素を学習方法別に分析したが、基礎について、創作、演奏、歌唱などの技能と音楽の諸要素に関する知識を包括するものであると結論づけた。また、音楽を自分の力で表現できるようになることが最終的な目標となっているオーストラリアにおいて、基礎は音楽学習に不可欠な土台を形成するものであると同時に、音楽と他の分野を統合する芸術科³⁾を形成する上でも必須の要素となるとも述べている。この研究から我が国の音楽科教育のあり方を検討する視座を形成することはできたものの、教科書から基礎の役割を明らかにした研究であり、実践については触れられていない。

共通事項を扱った研究として、竹井ら(2012)⁴⁾が挙げられる。竹井らは教科書出版社3社の示す歌唱共通教材における共通事項の取り扱いに着目し、音楽の諸要素に関する分析を行っている。そのうえで、諸要素の中でも拍を取り上げ、拍の存在を意識させる実践を行っている。題材は、拍を知覚し、さらに表現するものとなっているが、実践の対象が1年生ということもあり、歌唱・鑑賞・器楽・創作の4領域を網羅するものではない。

先の井内は、オーストラリアでは音楽を表現できるようになることが最終的な目標となっていると述べているが、我が国においても表現の能力を育成することは重視されており⁵⁾、そのためにはまず、音楽を知覚する力を高める必要がある。知覚は、主として歌唱や鑑賞の活動によって行うことができる。表現（音楽表現）は、歌唱や器楽の活動はもちろん、創作の活動によっても行うことができる。知覚が受動的な音楽活動であるとすれば、表現は能動的な音楽活動といえよう。諸要素

を自分の力で表現するためには、まず要素を知覚し、自分で自由に使うことのできるレベルにまで達している必要がある。すなわち、表現は、知覚に比べてより高次の活動である。

本研究では、子どもたちの諸要素に関する能力について、音楽を知覚するレベルにとどめることなく、表現するレベルに上げることを目的とする。一連の音楽活動は、個々の音楽の要素を意識させつつ複数を関連付けながら行うこととするが、具体的にはこれらの活動をとおして、自分の音楽を表現できる子どもを育成することを目的とする。

2 拍・リズムを扱う意義

先に述べた竹井らの研究においては、諸要素の中でも拍が取り上げられている。その理由について「音楽が生じると同時に始まる『拍』の存在は、9年間の最初の段階で教えるべきであると考えたから」⁶⁾と述べている。筆者も、拍・リズムは低学年から無理なく、継続的に扱うことのできるものであると考える。また拍・リズムは、動作などを伴い自分の身体をもって捉えることができるため、子どもたちにとって比較的知覚しやすい要素であるといえる。

本学校園音楽科では、「幼・小・中一貫カリキュラムに関する実践的研究―音楽の基礎的能力（共通事項）を確実に身に付けながら―」を研究主題とし、日々の教育活動に取り組んでいる。本年度は諸要素の中でも「拍・リズム」に重点を置いている。筆者は第2学年以外の小学校すべての学年で授業を行っているが、特に低学年においては、からだ全体を使って感じとるような授業を展開している。楽曲やリズムにあわせて自由に踊るときもあれば、歩いたり、スキップしたり、みんなで指揮をしながら歌うこともある。常時活動として4月から以下のような活動を続けてきた。

○ 4分の4拍子の既習曲（「きらきらぼし」「茶つみ」など）を、筆者が四分音符・八分音符・付点八分音符のそれぞれのリズムで変奏し、子どもたちが聴き分けて動作で表現する。

- ♪♪♪♩の手拍子に言葉をのせ、リレーのようにつなげていく。
- さまざまなリズムにあう言葉を探していく。



図1 拍の流れを大切にしながらつなげる

これらの活動を重ねることにより、拍節感が身に付き、自然とからだに拍が流れると考えられるが、これは自然とからだに音楽が流れることを意味する。生きた音楽には必ず拍が流れている。

3 「お祭りの音楽」と関連する題材

「お祭りの音楽」の題材（後述5 実践事例）を設定するにあたり、事前に「拍の流れにのろう」「曲の谷と山をさがそう」の2つの題材に関する実践を行った。以下に、これらの題材の概要および実践に関する成果と課題を記す。

①「拍の流れにのろう」（第3学年）

筆者は本題材を、日頃より身につけてきた拍節感・リズム感を、主として歌唱や鑑賞の活動によって認識し、さらに理解を深め、表現につなげていくものと捉えた。拍・リズムは音楽を構成する重要な要素の一つであり、身につけた力を歌唱・鑑賞・器楽・創作のあらゆる活動において活用できる点に、拍・リズムを重点的に扱う大きな意義があると考えた。

授業では、歌唱の活動において、各々が指揮やからだを動かすなどして拍子を感じ取った。そのうえで伴奏形に着目したところ、曲中でのリズムやアーティキュレーションの違いに気付き、曲想にふさわしい表現を考え、歌唱や器楽、動作など複数の方法によって表現することができた。また鑑賞の活動においても、指揮やからだを動かすな

どして拍子を感じ取り、拍の流れにのって音楽を聴くことができた。

子どもたちは新たな楽曲と出会うと、からだを動かしたり指揮したり、それぞれの方法で音楽を「かんじる」ことができる。本題材における出会いの場面でも、それを自然に行うことができていた。鑑賞の活動においては、このように自然に拍の流れにのることで、楽曲に入り込み、集中して聴くことができた。これをさらに、強弱などほかの諸要素と関連付けるところまで踏み込めば、曲想の変化や楽曲の構成にも気付くことができ、より充実した活動にすることができたであろう。

②「曲の谷と山をさがそう」（第3学年）

主として歌唱や鑑賞の活動において、子どもたちの感受したイメージを諸要素と結びつけることで、諸要素を音楽的根拠とした音楽活動を行うことができる。しかし、諸要素の中にもイメージと結びつけやすいものとそうでないものがある。たとえばリズムは日頃から力を入れて取り組んでいることもあり、子どもたちも理解しやすく結びつけやすいが、旋律はそうとは言い難い。本題材では、旋律のラインが描く「谷」や「山」に着目させ、イメージと音の動きとを結びつける授業を設定した。もちろん、楽曲はテンポや強弱などほかの諸要素も関わってくるため、イメージと旋律のみを結びつけることは難しいが、意図をもって旋律をつくっていくきっかけとなる授業としたいと考えた。

楽曲は子どもたちが耳にしたことのありそうなものを中心に、雰囲気異なる複数の旋律を用意し、比較してイメージをもちやすくした。ワークシートに旋律をのせ、音符と音符を線でつなぎ、谷や山の多さとイメージをつなげるような授業を展開した。

その際、感じ取ったイメージをうまく言葉で表現できない子どもが多くいることに気付いた。そのため、形容詞や形容動詞を中心にいくつかの言葉を示し、自分たちでも探し、共有し言葉を増やすようにした。なお、形容詞や形容動詞に限定したのは、これらの言葉が諸要素の特徴と関連しやすく（例えば、「はねるような」イメージははねるような細かいリズムを使っているなど）、子どもたちが諸要素に目を向けやすいと考えたからである。

子どもたちは旋律のラインを描いたものの、谷や山といった表現は難しく、低い音を谷、高い音を山ととらえ、音高とイメージの結びつきを考えた子どもも多くいた。また、はじめは音の動きとイメージのみを結びつける授業を試みたが、やはりリズムやテンポなどのほかの諸要素との結びつきも強かったため、複数の諸要素を捉え、イメージと結びつけていく授業へと修正を加え、「お祭りの音楽」の学習へとつなげていった。

4 研究の方法

これまで学習してきた「拍・リズム」に関する学習（「拍の流れにのろう」を中心とする）、「旋律」に関する学習（「曲の谷と山をさがそう」を中心とする）での知識・技能を生かせるような創作の発想を引き出し、実践を行う。子どもたちの創作の過程や、つくった旋律から、これらの諸要素に関する能力の高まりをみる。

5 実践事例

(1) 題材の概要

題材名 「お祭りの音楽」

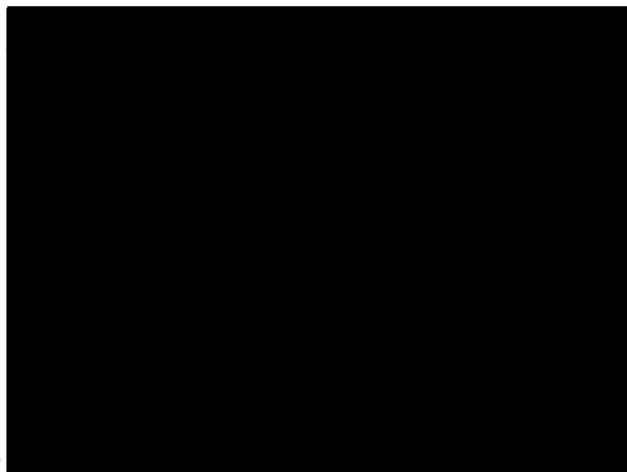


図2 旋律の谷と山を探し、イメージと結ぶ

対象学年 第3学年

実施時期 2013年11月～2014年1月

題材構成(全9時間)

第一次 お祭りの音楽をきこう 1時間

第二次 お祭りの音楽をつくらう 2時間

第三次 つくったせんりつを… 4時間

第四次 発表会をしよう 2時間

題材目標

- ・リズムを選ぶ活動や音高をつける活動に興味をもち、進んで旋律をつくるようにする。
- ・リズムや音の動きを工夫しながら、自分のイメージにあった旋律を表現するようにする。
- ・基本拍やリズムを感じ取りながら、演奏するようにする。
- ・お祭りの音楽の演奏を聴き、音楽の諸要素とイメージとの関連に気付くようにする。

(2) 題材について

本題材は、リズムや音の動きを工夫して自分のイメージにあった旋律をつくる活動をとおして、音楽の諸要素に着目して創作を行う力を育成することを目的とした、小学校学習指導要領A表現(3)イ「音を音楽に構成する過程を大切にしながら、音楽の仕組みを生かし、思いや意図をもって音楽をつくること」に関連する題材である。これまではリズムや音の動きに着目し、それらがどのようなイメージを醸し出すかといった学習を、主として題材「曲の谷と山をさがそう」における、鑑賞の活動をとおして行ってきた。本題材では、これまで身につけてきた拍節感・リズム感、音の動きなど、複数の音楽の諸要素をもとに旋律づくりを行うことにより、自分のつくりたいイメージにあわせてリズムや音の動きを工夫して創作することのできる点に大きな価値があると考えられる。

(3) イメージにあった旋律をつくるための手立て

本題材では、これまで主として歌唱や鑑賞の活動で経験してきた、諸要素に関する知識を思い出しながら、能動的に創作を進め、表現していくが、特に以下のような工夫を行う。

- ①テーマを「お祭り」とし、五音音階を使う、すなわち使用音の限定を行うことで、お祭りの音楽らしい旋律をつくりやすくする。
- ②これまでの学習と同様に、イメージの異なる2つのお祭りの音楽を用意することで、楽曲のイメージを捉えやすくする。自分の好きなイメージを選び創作を進めていくが、その際に選択する2種類の音楽に大きな偏りが出ないように、普段親しみのないイメージの音楽との出会いを大切にし、興味をもたせるようにする。
- ③リズムをつくる際には、自分のもったイメージとリズムを関連付けるために複数のカードを用いて組み合わせることとするが、1拍ずつのカードではなく2拍で1枚となるカードを用いることで、リズムパターンをつくりやすくする。

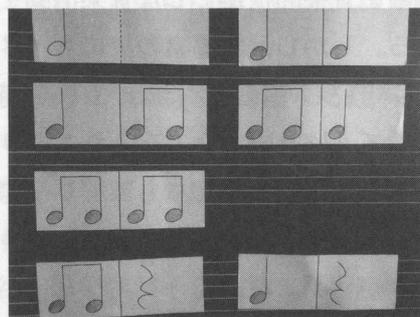


図3 7種類のリズムパターン

(4) 授業の実際

○ 第一次 曲のイメージを捉える

まず学習のはじめに、子どもたちの思い浮かべるお祭りを問うたところ、「三原やっさ祭り」「尾道ベッチャー祭り」などの元気なイメージのお祭りばかりが挙がった。「三原やっさ」の映像を流すと、一緒に踊りだしたり、からだを動かしたりと、楽しそうに拍の流れのにりながら音楽を感じる様子が見られた。

「これもお祭りの音楽です」と言い「おわら風の盆」の映像を流すと、子どもたちは驚き、興味を示した。祭りの由来を話し、喜びを表現した音楽である点については「三原やっさ」と相違ないことを確認したうえで、班ごとに「おわら風の盆」について調べ、関心を深めた。

2種類の音楽を「元気な」「おだやかな」とい

うグループに分け、イメージに合う言葉を挙げた。

表1 2種類のお祭りのイメージ

やっさ 三原	元気な	ゆかいな	はじける
	たのしい	にぎやか	かたい
	はげしい	ポップな	
風の盆 おわら	おだやかな	しなやかな	おしとやかな
	ゆったり	ゆるやか	やわらかい

○ 第二次 旋律をつくる

前時に共有したイメージの中から、自分の好きなイメージを選んだ。そのうえで二分音符、四分音符、八分音符、四分休符を含む7種類のリズムパターンを組み合わせて、自分のイメージに合う4分の4拍子2小節のリズム創作を行った。

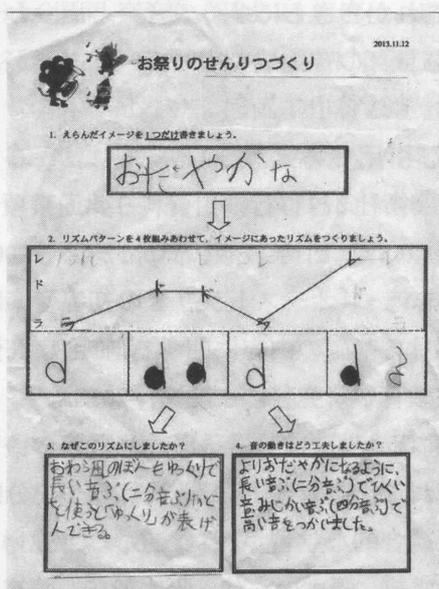


図4 手順を踏んで、旋律をつくる

さらに曲の山と谷の学習を思い出しながら音の動きを考え、A, C, Dの3音を用いて音をつけていき、旋律創作を行い、リコーダーで演奏した。

○ 第三次 旋律をつなげる、あわせる

子どもたちに、完成した旋律をどうしたいかをたずねると、「友達とコラボしたい」「楽器と合わせたい」「発表会をしたい」と多くの意見が出てきた。そこで筆者が、選んだイメージの近い子

どもを5～6人のグループに分け、グループごとに旋律をつなげたり、あわせたりして新たな音楽をつくることとした。拍の流れにのりながら自分たちの旋律を表現することのできたグループは、付点音符、四分音符、四分休符の3種類のリズムを含んだリズムパターンをつくり、それを和太鼓のリズムとして、リコーダーの旋律とあわせて曲を完成させた。

6 結果と考察

本研究における実践は、「お祭りの音楽」という一見、日本の音楽を学習内容とした題材にも見えるが、実際はこれまで身につけてきた拍節感・リズム感を応用した学習である。諸要素の中でも拍・リズムと旋律の2つの要素に着目しながら実践を行った結果、以下の三点が明らかとなった。

一点目は、これまでに創作の経験が少ない子どもたちにおいても、創作のための発想を引き出し、ワークシートに沿って手順を踏みながら進めていくことで、それぞれのイメージに合った、意図をもった音楽をつくることができるということである。まずリズムを組み合わせ、そのうえで音をつけていくといったように、要素を1つずつ意識させながら創作を進めていったが、図4のような既習事項を生かした音楽も多く見られ、諸要素を知覚するレベルから表現するレベルへと上げることができたといえる。

二点目は、楽曲との出会わせ方が重要であり、子どもたちのもった興味をさらに深める創作の過程を仕組むことができるということである。全体の約3分の1となる11名の子どもたちは、普段なじみのなかった、おわら風の盆のような「おだやかな」イメージで創作を行っていたが、これらの子どもたちは、この音楽をさらに知りたいと、積極的に調べたり、話したりしていた。自らの手を使って情報を得ることで興味が深まり、創作の活動を進めていくことができたと考えられる。

三点目は、試行錯誤しながら自分の旋律をつくりあげることが、子どもたちの満足感につながり、

積極的な音楽活動へと変化していくことである。これまで受動的な音楽活動を中心に行ってきた子どもたちにとって、何度も考え直しながら自分で音楽をつくりだす創作の活動には関心が高く、旋律ができたときの喜びも大きかった。子どもたちが、一度完成させた自分の旋律を、自分の中だけに留めず、さらに友達と「つなげたい」「あわせたい」と要求してきたことから、子どもたちの満足感を感じることができた。これらの声は、積極的かつ能動的な音楽活動を表しているといえる。

創作を行う際には、頭の中だけで考えずに必ず音を出しながら行うことを徹底したが、これが、思い思いの旋律を完成させることができた一つの要因であったと考える。創作の過程では、一人一人が自分だけの旋律をつくっているという意識を持っていないように感じた。そのため、まったく同じイメージでまったく同じリズムパターンを用いた2人の子どもの旋律を取り上げ、音高のつけ方の違いによって異なる音楽となったことを共有したが、子どもたちはこの事実には驚き、興味をもった。この共有の後に、子どもたちは自分だけの旋律を創作しているという意識をもちながら創作を進めることができるようになったと感じる。

また、以下の三点を本研究の課題とする。

「五音音階を使う」「リズムパターンは2拍で1枚のものを選ぶ」などの限定を行ったことについては、メリットとデメリットがあった。拍・リズムに関して、子どもたちは筆者の想像以上の能力を身につけてきていた。中にはリズムパターンを組み合わせるだけでは自分のもつイメージを表現することが困難であるために、リズムパターンを自分でつくって表現したいと相談にきた子どももいた。イメージと合わせやすいように、リズムパターンを複数拍にし、選択をさせたが、これが逆に子どもたちの表現したい音楽から遠ざけてしまった可能性がある。つなげたりあわせたりする際に、どのグループも手拍子で一定の拍節感をキープしたり、拍数をカウントしたり、全員が演奏することのできるテンポを考えたりしながら、上手にグループ内の拍節感を共有することができ

ていた。このような実態から、リズムパターンは選択でなく、つくらせてもよかったのかもしれないと感じる。

また、音を限定したことに関しても、もっと音を使いたいといった声が多くあり、リズムパターンと同様に、子どもたちの表現したい音楽から遠ざけてしまった可能性がある。今回は技術面を考慮したうえで、五音のうちさらに三音のみを用いたが、知識は技能を伴わせながら身につけさせるものであり、知識と技能のどちらが先行してもならず、ともに関連・補完しながら身につけていくべきであることが、改めて明らかとなった。

最後に、現在イメージを捉えやすくすることを目的として、感受した音楽を利便上大まかに二分化しているが、このことは子どもたちの音楽観を狭める危険性がある。音楽が二分化できるはずはなく、これからさらに多くの音楽と出合わせ、子どもたち自身の音楽観を広げていく必要がある。

註および引用参考文献

- 1) 教育芸術社：「移行期用資料〔共通事項〕の指導について 小学校版」, pp. 2-4, 2008.
- 2) 井内志穂：「オーストラリアの初等音楽教科書における基礎の内容に関する研究」広島大学大学院教育学研究科修士論文, 2013.
- 3) 音楽 (Music) は芸術科に、分野の1つとして含まれる。芸術 (The Arts) は5つの分野をもち、統合的な学習が行われる。
- 4) 竹井成美, 藤本いく代, 阪本幹子, 菅裕, 稲野さやか, 岡元雅代, 谷口朋美, 山下さちか, 松田美由紀：「音楽科における小中一貫教育に関する研究 (1) - 「共通事項」の取り扱いを中心として-」『宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要』第20号, pp. 59-69, 2012.
- 5) 福岡市教育センター：「音楽科における表現の能力を培う学習指導-音楽づくり・創作の授業構成の工夫を通して-」『平成21年度研究紀要』第822号, 2009.
- 6) 前掲4), p. 62.